

『太平広記』 訳注

—— 卷四百十八「龍」一（下） ——

太平広記読書会

本稿は前稿「『太平広記』 訳注 —— 卷四百十八「龍」一（上）——」（『国語国文学研究』第四十三号 二〇〇八年）に続き、『太平広記』の卷四百十八の訳注である。『太平広記』は北宋の初めに編纂された小説を集めた類書である。本書は日本の説話文学に影響を与えたことでも知られており、その訳注を行うことは今後の中国文学・日本文学双方の研究に資するところが大きいと考える。

またこれは平成十七年七月十四日より始まった『太平広記』読書会の成果の一部でもある。当読書会は熊本大学所属の教員を中心にして、他大学の教員や学生、社会人など、所属の枠にとらわれず広く集まった有志による会であり、今後も『太平広記』を読み進めていく予定である。

底本、参考文献、及び字体については前稿に記した通りである。なお、作品番号は前稿の続きとする。

○10 「梁武后」

〔本文〕

梁武郁皇后性妬忌。武帝初立、未及冊命。因忿怒、忽投殿庭井中。衆趨井救之、后已化爲毒龍。煙焰衝天、人莫敢近。帝悲歎久之、因冊爲龍天王、便於井上立祠。（出『兩京記』）

〔訓読〕

梁武の郁皇后は性 妬忌なり。武帝 初めて立ち、未だ冊命するに及ばず。因りて忿怒し、忽ち殿庭の井中に投ず。衆 井に趨りて之を救はんとするも、后 已に化して毒竜と爲る。煙焰 天を衝き、人 敢へて近づく莫し。帝 悲歎すること之を久しくし、因りて冊して竜天王と爲し、便ち井上に於いて祠を立て。

〔語注〕

○梁武 梁の武帝のこと。在位五〇二―五四九。梁の初代皇帝。南蘭梁（現在の江蘇省鎮江市の東南）の人。中興二年（五〇二）、齊から政權を奪取し、梁を建国した。○郁皇后 梁の武帝の后。

四六八、四九九。高平金郷（現在の山西省高平市）の人。諱は徽。諡は德。建武五年（四九八）に武帝は雍州刺史となると、

自分は先に任地に赴き、後に彼女を州に迎えた。しかし翌永元元年（四九九）に后は三十二歳で亡くなった。中興二年（五〇二）、武帝が梁公に封ぜられると梁公妃の位を贈られ、ついで武帝が帝位に就くと皇后の位が追贈された。『梁書』卷七に伝がある。○册命 皇后や皇太子、宰相などを任命する際に、詔書を下して命じること。冊立する。『尚書』「顧命」に「大史秉書、由賓階躋、御王册命。」（大史 書を乗り、賓階に由りて躋り、王を御へて冊命す。）とある。○『兩京記』 未詳。『太平広記』には七話が収録されており、内容的には唐代の兩京（長安と洛陽）のことを記している。或いは『兩京新記』のことか。『兩京新記』は、唐・韋述の撰。開元年間（七一三～七四一）に成立し、唐代の兩京のことを記す。もと五卷あったが散佚し、その残欠本一卷が尊経閣に残る。

〔訳文〕

梁の武帝の都皇后は嫉妬深い性格であった。武帝が即位したばかりの頃、まだ皇后を冊立していなかった。皇后はそのことを怒り、突然宮殿の庭の井戸に飛び込んだ。人々は井戸に駆け寄って助けようとしたが、皇后は既に毒竜と化していた。煙と炎が天を衝く勢いで噴き上がり、誰も近づくことができなかった。武帝はしばらく悲嘆に暮れ、皇后を竜天王に封じて井戸のほとりに祠を立てた。

○11「劉甲」

〔本文〕

宋劉甲居江陵。元嘉中、女年十四、姿色端麗。未嘗讀佛經、忽能暗誦「法華經」。女所住屋、尋有奇光。女云、「已得正覺。宜作二七日齋。」家爲置高座、設寶帳。女登座、講論詞玄。又說人之災祥、諸事皆驗。遠近敬禮、解衣投寶、不可勝數。衡陽王在鎮、躬率參佐觀之。

經十二日、有道士史玄眞曰、「此怪邪也。」振褐往焉。女即已知、遣人守門。云、「魔邪尋至。凡着道服、咸勿納之。」眞變服奄入。女初猶喝罵、眞便直前、以水灑之、即頓絕。良久乃甦、問以諸事、皆云不識。眞曰、「此龍魅也。」自是復常、嫁爲宣氏妻。（出『渚宮舊事』）

〔訓読〕

宋の劉甲 江陵に居る。元嘉中、女 年十四にして、姿色端麗なり。未だ嘗て仏經を讀まざるに、忽ち能く「法華經」を暗誦す。女の住まる所の屋に、尋いで奇光有り。女云ふ、「已に正覺を得たり。宜しく二七日の齋を作すべし」と。家 爲に高座を置き、宝帳を設く。女 座に登り、講論して玄を誦く。又た人の災祥を説き、諸事 皆驗あり。遠近 敬礼し、衣を解き宝を投ずること、數ふるに勝ふべからず。衡陽王 鎮に在り、躬ら參佐を率ゐて之を觀る。

十二日を経、道士史玄眞有りて曰く、「此 怪邪なり」と。褐を振るひて往く。女 即ち已に知り、人を遣りて門を守らし

む。云ふ、「魔邪 尋いで至らん。凡そ道服を着くるものは、威^{みな}之を納^いるる勿かれ」と。真服を變じて奄^{たづま}ち入る。女初め猶ほ喝罵するも、真便^{あた}ちに直り、水を以て之に灑^まげば、即ち頓絶す。良や久しくして乃ち魘^やり、問ふに諸事を以てするも、皆識^しらずと云ふ。真曰く、「此れ魘魅なり」と。是より常に復し、嫁して宣氏の妻と爲る。

〔語注〕

○宋劉甲 未詳。○江陵 現在の湖北省荊州市辺り。かつての楚の都郢がここにあり、繁栄を誇った。南朝では上流の重鎮たるとともに、下流の国都に対する脅威でもあった。○『法華經』五胡十六国後秦の頃の人、鳩摩羅什が漢訳した仏典の中でも『維摩經』と並んで重要視された經典。南朝ではよく読まれていた。○正覺 正しい仏の悟り。等正覺、無上正覺。○二七日齋 六斎の一つか。六斎とは、仏教の在家信者が八斎戒（不殺生・不偷盜・不姪・不妄語・不飲酒・化粧や歌舞に接しない・高くゆつたりした床で寝ない・昼過ぎに食事しない）を守り、精進すること。その精進は月の八日・十四日・十五日・二十三日・二十九日・三十日の六日と決まっていたから、六斎日ともいう。ここでは二×七＝十四ということで、十四日の齋日のことを言うか。○高座 法会・講經など説法講説の折に講經の僧が座る、一般聴聞者より一段高く設けられた座席。○寶帳 宝で飾られたとばり。斗帳。○解衣 衣を脱ぐこと。ここでは、脱いだ衣を娘に与えたことを言うか。『史記』卷九十二「淮陰

侯列伝」に「漢王授我上將軍印、予我數萬衆、解衣衣我、推食食我、言聽計用。故吾得以至於此。」（漢王 我に上將軍の印を授け、我に數萬の衆を予へ、衣を解きて我に衣はしめ、食を推して我に食らはしめ、言は聴き 計は用ふ。故に吾 以て此に至るを得たり。）とある。○衡陽王 宋の武帝劉裕の末息子、衡陽文王劉義季のこと。元嘉元年（四二四）に衡陽王に封じられ、同九年（四三二）に南徐州刺史に遷っている、この話はその間の出来事ということになる。元嘉二十四年（四四七）、病によつて三十三歳で亡くなる。『宋書』卷六十一に伝がある。○參佐 下役、属僚。○史玄眞 未詳。○振褐 「褐衣」は粗末な衣で、一般の僧が着る衣のこと。ここでは僧ではなく、道服のことと思われる。「振衣」は立ち上がった衣の塵を払うこと。或いは、衣服をはためかせて歩くことか。『幽明錄』二百四十九話に「忽見此女子、振衣而來、即與燕好。」（忽ち此の女子を見るに、衣を振るひて来たり、即ち与に燕好す。）とある。○龍魅 「魅」は人を誑かすこと。ここでは、竜が人を誑かしたことを言うか。○『渚宮舊事』 唐、余知古撰。唐代に至るまでの楚の出来事を記す。「渚宮」は郢の南にあった宮殿のこと。

〔訳文〕

宋の劉甲は江陵に住んでいた。元嘉年間（四二四～四五三）、十四歳の娘がおり、容姿端麗であつた。娘はそれまで仏教の經典を読んだこともなかったのに、突然『法華經』を暗誦できるようになった。程なく娘が住んでいる部屋に不思議な光が現れ

た。娘は「私は既に悟りを得ました。十四日の齋を行いましう。」と言った。家族は彼女の為に高座と宝帳を設けた。娘は高座に登り、仏の教えを講じて玄について語った。また人の吉凶を説き、どれもその通りになった。遠近のものは皆彼女を敬い、着ていた衣服や宝物をささげること、数え切れぬ程であった。衡陽王はその任地にあつて、自ら配下を引き連れて御覧になった。

十二日経つと、道士の史玄真が「これは邪惡な者の仕業である。」と言ひ、褐衣をはためかせてやつて来た。娘はすぐにそれを知つて、人に門を守らせて「邪惡な者が間もなくやつて来るでしょう。道服をまとつた者は、誰も入れてはなりません。」と言ひつけた。玄真は服を変じてすぐに入つてきた。娘は初めはまだ声をあげて罵つていたが、玄真が前に立つて水を注ぎかけると、すぐにぱったり倒れこんだ。暫くしてやつと目を覚ましたので、それまでのことを色々尋ねたが、何も分からないと言つた。玄真は「これは竜に魅入られたのである。」と言つた。それから娘は元に戻り、嫁いで宣氏の妻となつた。

○12 「宋雲」

〔本文〕

後魏宋雲使西域、至積雪山。中有池、毒龍居之。昔三（明鈔本三作五）百商人止宿池側、值龍忿怒、汎殺商人。果陀王聞之、捨位與子、向鳥場國學婆羅門呪。四年之中、善得其術。還復王

位、就池呪龍。龍化爲人、悔過向王。王即從之。（出『洛陽伽藍記』）

〔訓読〕

後魏の宋雲 西域に使ひし、積雪山に至る。中に池有り、毒竜 之に居る。昔三百商人 池の側に止宿するに、竜の忿怒に値ひ、商人を汎殺す。果陀王 之を聞き、位を捨て子に与へ、鳥場国に向いて婆羅門の呪を学ぶ。四年の中、善く其の術を得たり。還りて王位に復し、池に就きて竜に呪る。竜 化して人と爲り、過ちを王に悔ゆ。王 即ち之を従ふ。

〔語注〕

○後魏 王朝名。三八六―五三四。北魏ともいう。鮮卑の拓跋珪が建国し、平城（現在の山西省大同市の東）に都を置いた。後、孝文帝は四九四年に都を洛陽に遷した。五二三年に起こつた六鎮の乱が引き金となり、後魏は五三四年に東魏・西魏の二つの政權に分裂した。○宋雲 生没年未詳。敦煌（現在の甘肅省敦煌市）の人。北魏の胡太後の命を受け、神龜元年（五一八）に、沙門の法力や惠生（慧生とも書く）らと西方に使ひし、北インドを訪れて、正光三年（五二二）、仏典百七十部を持ち帰つた。一行は首都洛陽を出発してから吐谷渾に入り、その保護のもとに青海路をとって鄯善に出て、ホータン（于闐）、ワッカ（鉢和）を経てエフタル（嚙嚙）に至つてその王と会ひし、北インドに出てウジャーナ（烏場）、ガンダーラ（乾陀羅）などを訪れた。彼の見聞録として『宋雲家記』があつたが今は佚

している。『新唐書』卷五十八「芸文志」、『旧唐書』卷四十六「経籍志」に「魏国以西十一国事」一卷とあるのは同書を指すか。○西域 中国人が西方諸外国を総称するに用いた名。広義には今のインド・イラン地方や小アジア・エジプト地方をも含むこともあり、狭義には新疆ウイグル自治区南半のタリム盆地を中心とする地方を特称する。○積雪山 不可依山のこと。常に雪が積もっているから言う。この話は『洛陽伽藍記』巻五に収められており、そこには「三日至不可依山。其處甚寒、冬夏積雪。山中有池、毒龍居之。」(三日にして不可依山に至り、其の處 甚だ寒く、冬夏 雪を積む。山中に池有り、毒竜 之に居る。)とある。『洛陽伽藍記』(中国古典文学大系 平凡社 一九七四年)の入矢義高氏の注には「周(祖護)氏は小バミールに当て、深田(久弥)氏の前掲書(『中央アジア探險史』)ではカンダハール峠に比定している。」とある。○果陀王 未詳。『洛陽伽藍記』は「盤陀王」に作る。盤陀王は漢盤陀国の王。漢盤陀国は、現在のタシククルガン(Tashkurgan)。「渴槃陀」「渴槃陀」「渴槃陀」「渴槃陀」などとも書かれる。○烏場國「烏場国」に同じ。ウジャーナ(Udyana)。烏仗那国、烏婁国などとも書く。インダス河の上流のスワート川の河源地帯を領域とした国。呪術の類が盛んであったようで『大唐西域記』巻三「烏仗那国」には、「人性怯懦、俗情譎詭。好學而不功、禁呪爲藝業。」(人性 怯懦にして、俗情 譎詭なり。學を好むも功ならず、禁呪を藝業と爲す。)とある。また『洛陽伽藍記』

卷四に烏場国出身の沙門曇摩羅が不思議な術を用いた話が載せられている。「法雲寺、西域烏場國胡沙門僧曇摩羅所立也。…京師沙門好胡法者、皆就摩羅受持之。戒行眞苦、難可揄揚。祕呪神驗、閻浮所無。呪枯樹能生枝葉、呪人變爲驢馬。見之莫不忻怖。」(法雲寺は、西域烏場國の胡沙門僧曇摩羅の立つる所なり。…京師の沙門 胡法を好む者、皆摩羅に就きて之を受持す。戒行 眞に苦にして、揄揚すべきこと難し。秘呪神驗、閻浮に無き所。枯樹に呪らば能く枝葉を生じ、人に呪らば變じて驢馬と爲す。之を見るに忻怖せざる莫し。)○婆羅門 司祭者。barahmanaの音訳。インドにおけるカーストの内の最高のもの。僧侶階級。また単にインドからきた修行僧の意。○『洛陽伽藍記』東魏・楊銜之の撰。全五卷。北魏の首都が洛陽に遷ってから仏寺が興隆したが、永熙の乱で焼失したので、これに感じて旧聞を拾い集めたもの。城内と城外の東西南北についてそれぞれ一卷を当てて、寺院に関係のある政治、経済、地理、故事、異民族の習俗などを詳述している。

〔訳文〕

後魏の宋雲は西域に使いし、積雪山に至った。山中には池があり、そこには毒竜がいた。昔三百人の商人が池の側に宿った折、竜の怒りに遭って皆殺しになった。果陀王はそれを聞くと、王位を子に与えて烏場国で婆羅門の呪を学んだ。四年の間にその術をしつかり身に付けると、帰国して王位に復し、池に行つて竜に呪をかけた。竜は人と化して、王に過ちを悔いた。王は

この竜を従えることにした。

○13「蔡玉」

〔本文〕

弘農郡太守蔡玉以國忌日於崇（崇字原空闕。據明鈔本補。）敬寺設齋。忽有黑雲甚密、從東北而上、正臨佛殿。雲中隱隱雷鳴。官屬猶未行香、竝在殿前。聚立仰看、見兩童子赤衣、兩童子青衣、俱從雲中下來。

赤衣二童子先至殿西南角柱下、抽出一白蛇身長丈餘、仰擲雲中。雷聲漸漸大而下。少選之間、向白蛇從雲中直下、還入所出柱下。於是雲氣轉低着地、青衣童子乃下就住。一人捧殿柱、離地數寸。一童子從下又拔出一白蛇長二丈許、仰擲雲中。於是四童子亦一時騰上、入雲而去。雲氣稍高、布散遍天。至夜、雷雨大霽、至晚方霽。

後看殿柱根、乃蹉半寸許、不當本處。寺僧謂此柱腹空。乃鑿柱至心、其内果空。爲龍藏隱。（出『大業拾遺記』）

〔訓読〕

弘農郡の太守蔡玉 国忌の日を以て崇敬寺に於いて齋を設く。忽ち黒雲の甚だ密なる有り、東北よりして上り、正に仏殿に臨む。雲中 隠隠として雷鳴あり。官属 猶ほ未だ香を行はず、並びに殿前に在り。聚まり立ちて仰ぎ看るに、両童子の赤衣なる、両童子の青衣なる、俱に雲中より下り來たるを見る。

赤衣の二童子 先づ殿の西南角の柱下に至り、一白蛇の身の

長 丈余なるを抜き出だし、仰ぎて雲中に擲つ。雷聲 漸漸として大にして下り來たる。少選の間に於いて、向の白蛇 雲中より直ちに下り、還た出づる所の柱下に入る。是に於いて雲氣 転た低くして地に着き、青衣の童子 乃ち下りて就き住まる。

一人 殿柱を捧げ、地を離ること数寸。一童子 下より又た一白蛇の長二丈許なるを抜き出だし、仰ぎて雲中に擲つ。是に於いて四童子も亦た一時に騰上し、雲に入りて去る。雲氣 稍く高く、布散して天に遍し。夜に至り、雷雨 大いに霽し、晩に至りて方めて霽る。

後 殿柱の根を看るに、乃ち蹉ること半寸許、本處に当たらず。寺僧 此の柱は腹 空なりと謂ふ。乃ち柱を鑿ちて心に至るに、其の内 果たして空なり。竜の藏隱するところと為りしならん。

〔語注〕

○弘農郡 現在の河南省山門峽市の西南部、洛陽市と陝西省咸陽市の中間あたりの地。○蔡玉 未詳。○國忌日 代々の天子及び皇后の崩御の日に相当する忌日。この日役人達は職務を休み、寺や道觀に香を奉納して法要を行う。『新唐書』卷四十六「百官志」に「凡國忌廢務日、内教、太常停習樂、兩京文武五品以上及清官七品以上、行香於寺觀。」（凡そ國忌廢務の日には、内教、太常 樂を習ふを停め、兩京の文武の五品以上 及び清官の七品以上、香を寺觀に行ふ。）とある。○崇敬寺 長安・

静安坊にあった寺。会昌六年（八四六）に唐昌寺と改名された。

『唐会要』卷四十八「議釈教」下に「崇敬寺、在静安坊。本隋廢寺。高祖爲長安公主立爲尼。高祖崩後、改爲宮、以爲別廟。

後又爲寺。」（崇敬寺は、静安坊に在り。本隋の廢寺なり。高

祖 長安公主の爲に立てて尼と爲す。高祖 崩ぜし後、改めて宮と爲し、以て別廟と爲す。後又た寺と爲す。）とある。○齋

僧侶や道士などが行う法会。ここでは、読経して故人の追福

を祈る法要。○隱隱 雷の音。『後漢書』『天文志』上に「須臾

有聲、隱隱如雷。」（須臾にして声有り、隱隱として雷の如し。）とある。○蟬 長く雨が降ること。○龍藏隱 竜が樹木に隠れ

る話として、『論衡』『龍虚』篇に「盛夏之時、雷電擊折破樹木、發壞室屋。俗謂天取龍。謂龍藏於樹木之中、匿於屋室之間也。

雷電擊折樹木、發壞室屋、則龍見於外。龍見、雷取以升天。」

（盛夏の時、雷電 撃ちて樹木を折破し、室屋を發壞す。俗に天 竜を取ると謂ふ。竜 樹木の中に藏れ、屋室の間に匿るるを謂ふなり。雷電 撃ちて樹木を折り、室屋の間に匿るる

竜 外に見る。竜 見るれば、雷 取りて以て天に升る。）とある。○『大業拾遺記』作者未詳。二卷。『大業拾遺』『大業

拾遺録』『隋朝遺事』『隋遺録』『南部烟花記』『南部烟花録』とも呼ばれる。『崇文總目』『雜史』類は『大業拾遺』一卷、顏師

古撰と言うが、『百川学海』や魯迅『唐宋伝奇集』は二卷となっている。『大業拾遺記』無名氏の跋文によると、上元県の瓦棺

寺で発見された『隋書』の遺稿の中に顏真卿書写の『大業拾遺

記』があったという。顏師古撰とする説はこれと関わるか。

〔訳文〕

弘農郡の太守蔡玉は国忌日に崇敬寺で齋を設けた。突然真っ黒い雲が東北から真っ直ぐ仏殿に向かつてきた。雲の中からはごろごろと雷鳴が響いてきた。役人達はまだ香を奉納しておらず、仏殿の前に並んでいた。人々が立ったまま仰ぎ見していると、赤い衣の童子二人と青い衣の童子二人が一緒に雲の中から下りてきた。

赤い衣の童子二人が先に仏殿の西南の角の柱の所に行くと、一丈（三・一一m）余りの白蛇を一匹引つ張り出し、雲の中に投げ込んだ。すると雷鳴が段々大きくなって雲が地面に近づいてきた。しばらくすると先ほどの白蛇が雲の中から真っ直ぐ下りてきて、出てきた柱の下に戻っていった。すると雲は次第に低くなって地面に着き、青衣の童子が下りてきた。一人は柱を地面から数寸（一寸＝三・一一cm）の高さに持ち上げた。そしてもう一人の童子が柱の下からまた二丈（六・二二m）くらいの白蛇を一匹引つ張り出し、雲の中に投げ込んだ。そして童子四人も同時に飛び上がり、雲に入って去っていった。雲は段々高くなり、空中に散らばり広がった。夜になると雷雨が土砂降りになり、翌日の暮れ方になってやっと上がった。

その後仏殿の柱の根元を見ると、何と半寸（一・五五五cm）ほど元の場所からずれていた。寺の僧がこの柱が中空洞だと言うので中心まで穿ててみたところ、中は確かに空洞だっ

た。竜の隠れ家となつていたのであらう。

○14 「李靖」

〔本文〕

唐衛國公李靖、微時、嘗射獵靈山中、寓食山中。村翁奇其爲人、每豐饋焉。歲久益厚。

忽遇群鹿、乃逐之。會暮、欲捨之不能。俄而陰晦迷路、茫然不知所歸、悵悵而行。因悶益甚、極目有燈火光。因馳赴焉。既至、乃朱門大第、牆宇甚峻。扣門久之、一人出問。靖告迷道、且請寓宿。人曰、「郎君已出、獨太夫人在。宿應不可。」靖曰、「試爲咨白。」乃入告。復出曰、「夫人初欲不許、且以陰黑、客又言迷、不可不作主人。」邀入廳中。有頃、一青衣出曰、「夫人來。」年可五十餘。青裙素襦、神氣清雅。宛若士大夫家。靖前拜之。夫人答拜曰、「兒子皆不在、不合奉留。今天色陰晦、歸路又迷。此若不容、遣將何適。然此乃山野之居、兒子還時、或夜到而喧、勿以爲懼。」既而食。頗鮮美、然多魚。食畢、夫人入宅、二青衣送牀席褥、衾被香潔。皆極鋪陳、閉戶緊之而去。靖獨念山野之外、夜到而鬧者何物也。懼不敢寢、端坐聽之。

夜將半、聞扣門聲甚急。又聞一人應之。曰、「天符、報大郎子當行雨。周此山七百里、五更須足。無慢滯、無暴厲。」應者受符入呈。聞夫人曰、「兒子二人未歸、行雨符到。固辭不可、違時見責。縱使報之、亦以晚矣。僮僕無任專之理、當如之何。」一小青衣曰、「適觀廳中客、非常人也。盍請乎。」夫人喜、因自

扣其門曰、「郎覺否。請暫出相見。」靖曰、「諾。」遂下階見之。夫人曰、「此非人宅。乃龍宮也。妾長男赴東海婚禮、小男送妹。適奉天符、次當行雨。計兩處雲程、合逾萬里。報之不及、求代又難。輒欲奉煩頃刻間。如何。」靖曰、「靖俗人、非乘雲者。奈何能行雨。有方可教、即唯命耳。」夫人曰、「苟從吾言、無有不可也。」遂勅黃頭、繡青驄馬來、又命取雨器。乃一小餅子。繫于鞍前。戒曰、「郎乘馬、無勒（勒原作漏。據陳校本改。）銜勒信其行。馬跑地嘶鳴、即取餅中水一滴、滴馬鬃上。慎勿多也。」於是上馬騰騰而行、倏忽漸高。但訝其隱疾、不自知其雲上也。風急如箭、雷霆起于步下。於是隨所躍、輒滴之。既而電掣雲開、下見所憩村。思曰、「吾擾此村多矣。方德其人、計無以報。今久旱、苗稼將悴。而雨在我手。寧復惜之。」顧一滴不足濡、乃連下二十滴。

俄頃雨畢、騎馬復歸。夫人者泣於廳曰、「何相誤之甚。本約一滴、何私下二十尺之雨。此一滴、乃地上二尺雨也。此村夜半平地水深二丈。豈復有人。妾已受譴、杖八十矣。」但視其背、血痕滿焉。「兒子亦連坐。奈何。」靖慙怖、不知所對。

夫人復曰、「郎君世間人、不識雲雨之變。誠不敢恨。只恐龍師來尋、有所驚恐。宜速去此。然而勞煩、未有以報。山居無物、有二奴奉贈。總取亦可、取一亦可。唯意所擇。」於是命二奴出來。一奴從東廊出、儀貌和悅、怡怡然。一奴從西廊出、憤氣勃然、拗怒而立。靖曰、「我獵徒、以鬪猛事。今但取一奴、而取悅者人以我爲怯也。」因曰、「兩人皆取則不敢。夫人既賜、欲取怒

者。」夫人微笑曰、「郎之所欲乃爾。」

遂揖與別、奴亦隨去。出門數步、回望失宅。顧問其奴、亦不見矣。獨尋路而歸。及明、望其村、水已極目、大樹或露梢而已、不復有人。

其後竟以兵權靜寇難、功蓋天下。而終不及於相。豈非取奴之不得乎。世言關東出相、關西出將。豈東西喻邪。所以言奴者、亦下之象。向使二奴皆取、即極將相矣。(出『續玄怪錄』)

〔訓読〕

唐の衛國公李靖は、微なる時、嘗て靈山中に射獵し、山中に寓食す。村翁 其の人と為りを奇とし、毎に豊かに饋る。歳久しくして益ます厚し。

忽ち群鹿に遇ひ、乃ち之を逐ふ。会たま暮れんとし、之を捨てんと欲するも能はず。俄かにして陰晦 路に迷ひ、茫然として帰る所を知らず、悵悵として行く。因りて悶ゆること益ます甚だしきも、目を極むれば灯火の光有り。因りて馳せ赴く。既に至れば、乃ち朱門大第、牆宇の甚だ峻きあり。門を叩くことを久しくするに、一人 出でて問ふ。靖 道に迷ひたるを告げ、且つ寓宿せんことを請ふ。人曰く、「郎君 已に出で、独だ太夫人 在るのみ。宿ること応に可ならざるべし」と。靖曰く、「試みに為に咨白せよ」と。乃ち入りて告ぐ。復た出でて曰く、「夫人 初め許さざらんと欲せしも、且く以へらく陰黒にして、客 又た迷へりと言へば、主人と作らざるべからず」と。邀へて庁中に入る。頃く有りて、一青衣 出でて曰く、「夫

人 来たれり」と。年 五十余可。青裙素襦にして、神氣清雅たり。宛も士大夫の家の若し。靖 前みて之に拝す。夫人 答拜して曰く、「兒子 皆在らず、合に留め奉るべからず。今 天色 陰晦にして、帰路 又た迷へり。此 若し容さずんば、遣りて將た何れにか適かしめん。然れども此 乃ち山野の居にして、兒子 還りし時、或いは夜に到りて喧しきも、以て懼れを為す勿かれ」と。既にして食らふ。頗る鮮美なるも、然れども魚多し。食 畢はり、夫人 宅に入り、二青衣 牀席褥褥を送るに、衾被 香潔なり。皆鋪陳を極めて、戸を閉ざすことを之を緊しくして去る。靖 独だ念ふに 山野の外なるに、夜に到りて鬧がす者は何物なるかと。懼れて敢へて寝ねず、端坐して之を聴く。

夜 將に半ばならんとするに、門を叩く声の甚だ急なるを聞く。又た一人の之に應ずるを聞く。曰く、「天符あり、大郎子の當に雨を行ふべきを報ず。此の山を周ること七百里、五更 須らく足るべし。慢滯すること無く、暴厲すること無かれ」と。應ずる者 符を受け入りて呈す。聞くに 夫人曰く、「兒子二人 未だ帰らざるに、行雨符 到れり。固より辞するは可ならざるも、時に違はば責められん。縦使之に報ずるも、亦た以て晚れん。僮僕に任專の理無きに、當に之を如何すべき」と。一 小青衣曰く、「適たま庁中の客を觀るに、常人に非ざるなり。盍ぞ請ひざるか」と。夫人喜び、因りて自ら其の門を叩きて曰く、「郎 覚めたるや否や。暫く出でて相見えんことを請ふ」と。

靖曰く、「諾」と。遂に階を下りて之に見ゆ。夫人曰く、「此人宅に非ず。乃ち竜宮なり。妾が長男 東海の婚禮に赴き、小男 妹を送る。適に天符を奉り、次いで当に雨を行ふべし。兩処の雲程を計るに、合に万里を逾ゆべし。之に報ずるも及ばず、代を求むるも又た難し。輒ち頃刻の間を煩はし奉らんと欲す。如何」と。靖曰く、「靖は俗人にして、雲に乗る者に非ず。奈何ぞ能く雨を行はん。方の教ふべき有らば、即ち唯だ命ずるのみ」と。夫人曰く、「苟くも吾が言に従はば、不可有る無きなり」と。遂に黄頭に勅し、青驄馬に輔して来たらしめ、又た命じて雨器を取らしむ。乃ち一小餅子なり。鞍の前に繋ぐ。戒めて曰く、「郎 馬に乗りて、勒すること無く勒を銜ましめ、其の行くに信せよ。馬 地を跑きて嘶鳴せば、即ち餅中の水一滴を取り、馬の鬚上に滴らせ。慎みて多くすること勿かれ」と。

是に於いて馬に上りて騰騰として行き、倏忽として漸く高し。但だ其の隠疾なるを訝り、自ら其の雲上なるを知らざるなり。風の急なること箭の如く、雷霆 歩下にかかる。是に於いて躍る所に随ひて、輒ち之に滴らす。既にして電 雲を掣きて開き、下に憩ふ所の村を見る。思ひて曰く、「吾 此の村を擾すこと多し。方に其の人に徳まんとするも、計るに以て報ずる無し。今 久しく旱し、苗稼 将に悴まんとす。而して雨 我が手に在り。寧ぞ復た之を惜しまん」と。一滴の濡すに足らざるを願ひ、乃ち連下すること二十滴。

俄頃にして雨 畢り、騎馬 復た帰る。夫人なる者 佇に泣

きて曰く、「何ぞ相誤ることの甚だしきや。本 一滴を約せしに、何ぞ私かに二十尺の雨を下すか。此の一滴は、乃ち地上の一尺の雨なり。此の村 夜半にして、平地 水の深きこと二丈。豈に復た人有らんや。妾 已に讎を受け、杖八十なり」と。但だ其の背を視れば、血痕 満つ。「兒子も亦た連坐す。奈何せん」と。靖 慙ち怖れ、對ふる所を知らず。

夫人 復た曰く、「郎君は世間の人にして、雲雨の変を識らず。誠に敢へて恨みず。只だ竜師の来たり尋ね、驚恐する所有るを恐る。宜しく速やかに此より去るべし。然れども勞煩せしめ、未だ以て報いる有らず。山居にして物無きも、二奴の贈り奉る有り。総て取るも亦た可なり、一を取るも亦た可なり。唯だ扱ぶ所を意へ」と。是に於いて二奴に命じて出で来たらしむ。一奴は東廊より出で、儀貌和悦にして、怡怡然たり。一奴は西廊より出で、憤氣勃然として、怒りを掬へて立つ。靖曰く、「我は獵徒にして、鬪猛を以て事とす。今但だ一奴を取るに、而して悦ぶ者を取らば、人 我を以て怯と為すなり」と。因りて曰く、「兩人 皆取るは則ち敢へてせず。夫人 既に賜れば、怒れる者を取らんと欲す」と。夫人 微笑して曰く、「郎の欲する所は乃ち爾り」と。

遂に揖して与に別れ、奴も亦た随ひて去る。門を出づること数歩、回望すれば宅を失ふ。顧みて其の奴に問はんとすれば、亦た見えず。独り路を尋ねて帰る。明くるに及び、其の村を望めば、水 已に目を極め、大樹 或いは梢を露はすのみにして、

復た人有所らず。

其の後 竟に兵権を以て寇難を静め、功 天下を蓋ふ。而るに終に相に及ばず。豈に奴を取るの不得に非ずや。世に關東相を出だし、關西 將を出だすと言ふ。豈に東西の喻へならんや。奴と言ふ所以は、亦た下の象なり。向使し二奴 皆取らば、即ち將相を極めしならん。

〔語注〕

○唐衛國公李靖 五七―六四九。字は藥師、京兆三原（現在の陝西省西安市の北）の人。唐の高祖、太宗に仕えた名將。唐の建国に功績があつた。『旧唐書』卷六十七、『新唐書』卷九十三にそれぞれ伝がある。○靈山 中華書局点校本『統玄怪錄』は「霍山」に作る。霍山は、山西省霍県の西南にある名山。○悵悵 失意の様子。潘岳「哀永逝文」（『文選』卷五十七）に「悵悵兮遲遲、遵吉路兮凶歸。思其人兮已滅、覽餘迹兮未夷。」（悵悵として遲遲たり、吉路に違ひて凶歸す。其の人の已に滅せるを思ひ、余跡の未だ夷れざるを覽る。）とある。○廳表座敷。○黃頭 下僕。『逸史』「裴老」（『太平広記』卷四十二）「神仙」部に「至則果見小門。扣之、黃頭奴出。」（至れば則ち果して小門を見る。之を叩けば、黃頭奴 出づ。）とある。○韃 車駕の具。○小餅子 小さい釜のような器。『方言』卷五に「鍤、或謂之鍤。北燕朝鮮洌水間、或謂之鍤、或謂之餅。江淮陳楚之間謂之鍤、或謂之鍤。吳揚之間、謂之窩。釜自關而西或謂之釜、或謂之鍤。」（鍤は、或いは之を鍤と謂ふ。北燕朝鮮洌水の間、或いは之を鍤と謂ひ、或いは之を餅と謂ふ。江淮陳楚の間 之を鍤と謂ひ、或いは之を鍤と謂ふ。吳揚の間、之を窩と謂ふ。釜は關よりして西 或いは之を釜と謂ひ、或いは之を鍤と謂ふ。）とある。○龍師 『漢書』卷十九「百官公卿表」に「竜師」という官名が見えるが、ここでは竜を管轄する仙界の役人だと思われる。○廊 表座敷の左右にある脇部屋。○和悅 和やかに喜ぶ。『和説』に同じ。『史記』卷一百二十六「滑稽傳」に「武帝時有所幸倡郭舍人者、發言陳辭雖不合大道、然令人主和説。」（武帝の時 幸する所の倡 郭舍人なる者有り、言を發し辭を陳ぶるに大道に合はざると雖も、然れども人主を和説せしむ。）とある。○怡怡然 和やかなさま。にこにこする。『論語』「子路」篇に「子曰、『切切、惓惓、怡怡如也。可謂士矣。朋友切切惓惓、兄弟怡怡。』」（子曰く、『切切、惓惓、怡怡如なり。士と謂ふべし。朋友には切切惓惓、兄弟には怡怡』と。）とある。○勃然 顔色を変えらるさま。むっとするさま。『孟子』「万章章句」下に「曰、『君有大過則諫。反覆之而不聽、則易位。』王勃然變乎色。」（曰く、『君 大過有らば則ち諫む。之を反覆して聽かずんば、則ち位を易ふ』と。王 勃然して色を変ず。）とある。○拗怒 怒りを抑える。班固「西都賦」（『文選』卷二）に「蹂躪其十二三、乃拗怒而少息。」（其の十二三を蹂躪し、乃ち怒りを拗へて少く息ふ。）とあり、李善注に「拗、猶抑也。」（拗は、猶ほ抑のごときなり。）とある。○關東出相、關西出將 函谷關の東では宰相を、西では將軍を輩出する。『後

漢書』卷五十八「虞詡伝」に「喭曰、『關西出將、關東出相。』」(喭に曰く、「關西 將を出だし、關東 相を出だす」と。)○『續玄怪錄』唐の李復言(生没年未詳)の撰した伝奇集。牛僧孺の『玄怪錄』のあとを継ぐ意味で名づけられた。太和年間以降の異聞を記す。『新唐書』卷五十八「藝文志」・『直齋書錄解題』は五卷とするが、『郡齋讀書志』は十巻としている。南宋には臨安の書賈の刻した四巻本が出たが、四巻本は『統幽怪錄』と題している。『太平広記』には三十一話が収録されている。この話は前野直彬『六朝・唐・宋小説選』(中国古典文学大系 平凡社 一九六八年)に「一滴の水」と題して収められている。

〔訳文〕

唐の衛国公李靖は世に出る前、靈山で狩猟して山中に仮住まいしていた。村の老人は彼の人となりを得がたいものとして、いつも沢山の食べ物をくれており、年が経つごとに厚遇になっていた。

ある時、李靖は鹿の群に出くわして追い掛けた。ちょうど日暮れ方であったので諦めようとしたが、諦めきれなかった。しかしあつという間に真つ暗になって道に迷ってしまった、どう帰って良いかも分からず、とぼとぼ歩いていった。そしてますます困り果てていたところ、遙か彼方に灯りが見えたので、駆け寄った。到着してみると、何と朱塗りの門に大きな屋敷、高々と聳え立つ垣根があった。しばらく門を叩いていると、出

てきて誰かと尋ねる者があつた。李靖は道に迷ったことを告げ、さらに一夜の宿を求めた。その人は「旦那様はお出かけで、大奥様しかいらつしやいませんで、お泊めできません。」と答えたが、李靖が「試しに申し上げてみて下さい。」と言うので、中に入って申し上げた。再び出てきて言うには、「奥様は初めはお許しにならないおつもりでしたが、辺りも真つ暗で、客人は道に迷われたとのこと、主人となつてお迎えせざるを得まいとの仰せです。」李靖は座敷に招き入れられた。しばらくすると青衣の侍女が出てきて、「奥様がお出です。」と言った。夫人は年の頃は五十歳を過ぎたくらい、青い裳裾に白い薄絹をまとい、清らかな雰囲気であつた。まるで士大夫の家の夫人のようであつた。李靖は進み出て礼を施した。夫人は礼を返して、「息子達が居りませぬ故、お泊めするべきではございません。さりとてもはや空も暗く、道に迷われたとのこと。もしお泊めさしあげねば、一体どこに行かせることができましようや。そうは申してもここは山家ゆえ、息子が帰って来るのは夜になつてお騒がせるやもしれませぬが、どうか驚かれませぬよう。」と言った。それから食事になった。とても新鮮で美味しかったが、魚が多かった。食事が終わると、夫人は奥に入り、青衣の侍女二人が寝台や布団を持ってきてくれた。夜具は良い香りがして清潔だった。しつかりとしつらえると、戸を嚴重に閉めて出て行つた。李靖はこんな山奥なのに、夜にやってきて騒がず者とは一体何者だろうか、とばかり考えていて、怖くて眠るこ

ともできず、きちんと座つて耳をすましていた。

真夜中にならうとする頃、せわしげに門を叩く音が聞こえてきて、それに答える声も聞こえてきた。「天の命令書により、主に雨を降らせよとの御下命だ。この山の周囲七百里（三九一・八六km）、五更（午前五時頃）には終わらせておかねばならぬ。遅れてはならぬし、荒々しくしてもならぬ。」応対した者は命令書を受け取ると、中に入つて夫人に渡した。すると夫人が「息子二人もまだ帰つてきておらぬのに、雨を降らせる命令書が届いてしもうた。もとよりお断りすることはできぬが、期日を誤つてもおとがめを受けよう。もし息子達に知らせようとしても、それでは間に合わぬ。召使い達に任せることはできぬのに、一体どうしたものやら。」というのが聞こえてきた。すると一人の若い青衣の侍女が「偶然座敷のお客様をお見かけしました、ただ者ではないようです。お願いしては如何でしょうか。」と言つた。夫人は喜び、自ら部屋扉を叩いて、「お客様、起きていらつしやいますか。ちよつとおいで頂きたいのですが。」と言つた。李靖は「分かりました。」と答え、そうして階段を下りてお目にかかった。夫人が「ここは人間の住まいではありません。実は竜宮なのです。私の長男は東海の婚礼に出かけており、下の息子は妹を送つて出かけております。そこへ丁度天からの命令書を頂き、まもなく雨を降らせねばなりません。長男と弟の居場所までの道のりを考えてみますに、一万里（五五九八km）以上もあるはず。知らせようにも間に合い

ませぬし、代理の者を探すのも難しいのです。そこで僅かな時間お手を煩わすことをお願いしたいのですが、如何でしょうか。」と言うと、李靖は「私靖は俗人であつて、雲に乗るような者ではありません。どうしても雨を降らせることなどできません。しかし方法をお教えただけるのであれば、ただ御命令下さい。」と言つた。夫人は「私の言葉通りにして下さいましたら大丈夫です。」と答え、そこで黄色い頭巾の下僕に命じて葦毛の馬に馬具を付けて引いてこさせ、また雨器も持つてこさせた。なんと小さい釜であつた。それを鞍の前に繋いだ。夫人が戒めて言うには、「そなたは馬に乗つたら、轡を引かずに銜えたままにさせて、馬の好きなように行かせて下さい。馬が地面を掻いて嘶いたら、すぐに釜の中の水を一滴取り、馬のたてがみの上に垂らして下さい。決して増やしたりはなさらない。」とのことだつた。

そして馬に乗つてぐんぐん昇つていくと、見る間に高くなつていった。しかし李靖は早いのに穏やかなことを不思議に思ふばかりで、自分が雲の上にいることに気づいていなかった。風は矢のような勢いで吹き付け、雷鳴が足下で鳴り響いていた。そして馬が跳ねるのに合わせて、その度に水を垂らした。雷が雲を引き裂くと、下に世話になつてゐる村が見えた。李靖は「私はこの村に随分面倒をかけている。村人達に恩返しをしたと思うものの、お返しするすべがなかった。このところ長く日照りが続いて、苗が枯れかかっている。そして雨は我が手に

在る。どうして出し惜しみなどしようか。」と思った。そして一滴では足りないと考え、続けざまに二十滴垂らした。

あつと言う間に雨を降らせる仕事は終わり、馬は再び戻っていった。すると夫人は座敷で泣いており、「何ゆえかようなひどい過ちを。もともと一滴だとお願ひしておりましたのに、何ゆえ勝手に二十尺（六・二二m）もの雨を降らせたのですか。こちらの一滴は、地上の一尺（三一・一cm）の雨に相当するのです。この村は夜中には、平地で水の深さが二丈（六・二二m）にもなりました。どうして人が住めるでしょうか。私は既に罰として杖で八十回打たれました。」と言った。彼女の背中を見てみると、血まみれであった。「息子達も連坐することになりました。一体どうすればよいのやら。」李靖は恥ずかしさと恐れから、何と言つたらいいのか分からなかった。

夫人は更に「そなたは俗世の人間であつて、雲や雨の変化について御存知ありません。それ故一切怨みに思つたりなど致しませぬ。ただ竜師が取り調べに来て、そなたを怖がらせはせぬかと心配です。急ぎここを去られた方が宜しいでしょう。さりとてご面倒をおかけして、まだお礼を致しておりませぬ。山家故何もございませぬが、下僕を二人差し上げましょう。二人ともお連れになつても結構ですし、どちらか一人でも結構です。お好きになさいまし。」と言つた。そして下僕二人を呼び出した。一人は東の脇部屋から出てきたが、容貌は穏やかでにこにこしていた。もう一人は西の脇部屋から出てきたが、憤った様

子で、怒りを抑えながら立っていた。李靖は「私は獵師で、猛々しさを重んじている。今下僕一人だけを連れて行くなら、嬉しそうなのを連れていったら人は私のことを臆病者だと思つだろう。」と思い、「二人とも連れていくのはご遠慮いたします。折角奥様が下さるのですから、怒っている方の者をいただきたく思います。」と言つた。夫人は微笑んで、「そなたが望まれるのはそちらですね。」と言つた。

それから挨拶を交わして別れると、下僕も後をついていった。門を数歩出て振り返つてみると、家は見えなくなつていた。振り返り向いて下僕に尋ねようとすると、下僕も居なくなつていた。李靖はひとり道を探して帰つていった。明け方になつて元の村を見ると、見渡す限り水浸し、大木の梢が見えるばかりで、誰一人居なかつた。

その後李靖はついに兵を率いる身分となつて戦乱を鎮め、天下に鳴り響く功績を立てた。しかしとうとう宰相にはなれなかつた。それは下僕を手にいれる時に穏やかな下僕をもらわなかつたからではあるまいか。世間では函谷関より東は宰相を出し、函谷関より西は將軍を出すと言ふ。これが下僕の東西を喻えているのではあるまいか。下僕と言ふのは、臣下の象徴である。もし下僕を二人とも手にいれていたら、將軍と宰相の両方の位を極めていたであらう。

（続）

元原稿製作者・編集担当者

◎○屋敷 信晴

○項

青

○福本

睦美

山下 宣彦

永井 真平

椎原

誠

本園 明宏

東本由紀子

(○は編集担当者、◎は編集責任者)